

BEO東京 サセックス大学 説明会

3月23-24日に東京のBEOとSIUKで英国・アイルランド留学フェアが行われました。また、27日にはBEOでサセックス大学説明会が開催されました。

BEO 東京サセックス大学説明会には、16名ほどが訪れました。サセックス大学の担当官(Mr. James Minhas)から大学の詳しい説明が行われました。関心分野が開発関連の方が大半だったため、サセックス大学が開発学分野でいかに優れた大学かということを中心に説明がなされました。サセックス大学は、世界の大学ランキングで3年連続して開発学分野の1位になったこと、その先生方はアカデミックの経験だけでなく、実務の経験もあること、開発学研究所(IDS)がグローバルシンクタンクインデックスで2位になったこと、また開発学分野で世界に誇る蔵書量を持つ図書館があることなどが説明されました。

また、開発学研究所だけでなく、サセックス大学には他に3つの開発関連の学部(School of Global Studies、Science Policy and Research Unit (SPRU)、School of Education)があり、それぞれ開発関連の学問を学ぶのに優れた学部であることが説明され、その包括的な開発関連分野の教育・研究へのアプローチが強調されました。

その他、IDSでの日本の留学生の数や、日本の卒業生の国際協力分野での進路、どのような研究がどの学部でなされているか、大学の緑豊かな環境や、エキサイティングなフットボールスタジアムが近くにあることなどについても説明がありました。

Jamesからの説明の後、3人の同窓生が卒業後のキャリアについて話しました。まず高瀬千賀子さん('82 MA in Development Economics)はUNでのキャリアについて話しました。国連職員は開発学を学ぶ学生にとって大変関心の高い職種です。Associate ExpertでUNIDOに入った後、すぐに国連職員試験を受けて合格し、その後UNで働き続けた経緯や、現在のUNのジョブウェブサイト、多方に渡るUNでのキャリアの可能性、また外務省の国際機関人事センターから得られる情報などについて説明がありました。

次に、福地健太郎さん('12 MA in International Education and Development)がJICAでのキャリアについて話しました。サセックス大学では「サセックス

精神」、すなわち、「誰の声を聞いているのか、誰のために働いているのか」ということを学んだと説明がありました。これはIDSのロバート・チェンバース先生が唱えた「誰の現実が重要なのか、最後に聞く人のことをまず最初に聞け」などのメッセージと重なるもので、これからサセックスで学ぶ方々に強い印象を与えたと思います。また、これまでのJICAでのキャリアについて説明した後、留学前に英語や学ぶ分野の基礎を学んでおくことや、留学中には多くの人に会うこと、留学後に卒業生とコンタクトを保つことなどのアドバイスがありました。

次に、私('16 Ph.D. in Development Studies)から国連ボランティア(UNV)とコンサルタントとしてのキャリアについて説明しました。UNVは人々と近く働くことができる、として国連グアテマラ監視団にいた時の経験を話しました。また開発コンサルタントとしてJICAプロジェクト評価や政策メッセージを作成支援したことなどについても話しました。UNVもコンサルタントも開発の最前線で働く仕事であるその醍醐味を強調しました。

最後に、質疑応答の時間で「事前に英語や個別の学問の基礎の勉強はどのようにしたらよいか」、「UNVの給料はどのぐらいか」、「Brexitの留学への影響は？」など、時間で収まりきれないくらい多くの質問が出て、説明会が終わってからも参加者が個別に質問するほど盛況でした。

参加者にとって、留学前にこのような詳しい大学説明会に参加できることは、大変有益だろうと思いました。

(加藤 珠比)



説明会の後(左から福地さん、James氏、高瀬さん、筆者、川幡さん(MA in Globalization and Development))

Dore先生の思い出

賀来 公寛 (かく きみひろ)

MPhil in Development Studies, '78 修了

昨年11月14日、Ronの愛称で親しまれていたRonald Dore 先生が亡くなりました。イタリアに居を移されていた先生はボローニャの病院に半年前から入院されていたが、静かに息を引き取られたとIDSの友人から聞きました。93歳でした。私が先生と最初にお会いしたのは、IDSのMPhil, Development Studies, 1973-74の第一回目のコースに参加した時でした。今から4年も前のことになりますが、当時のことで今でも鮮明に覚えていることがあります。

このコースでは参加した学生一人一人にTutorと呼ばれる指導教官がつけました。私のTutorはDore先生で、その後2年間妻共々、公私にわたりお世話になりました。当時学生は毎週TutorにA42枚程度の手書きのレポートを提出することになっており、最初の頃に提出したレポートは、Dore先生によりページが真っ赤になるほど赤ペンで直されました。それまでこのような経験をしたことはなく、その時は衝撃でしたが、私は修正された文章を何度も読み返して勉強したことを覚えています。

英文を書くということについて徹底的に鍛えられたことはその後の私の人生にとって貴重な財産になったと思っています。当時先生は40代後半で、学者としてもThe Diploma Diseaseという本を書かれていて多忙な毎日をごさされておりました。そうしたなかでも、学生一人一人に時間をさいてくださり指導して下さったのは、教育者として教えられることが沢山あったと、その後自分が教育に携わる立場になって感じました。

'98年に日本に帰国し東洋大学で教鞭をとるようになってからは、Dore先生とは時折お目にかかる機会がありました。来日された際に浅沼さんが声をかけてくださり、一緒に食事し楽しい時間を過ごしました。そして、私がDore先生と親しく交流するようになったのは、2014年の春ころに浅沼さんからDore先生のメールアドレスを教えて頂いた時からです。先生は私の質問や意見にいつも丁寧に返事をくださり、頻繁にメールのやりとりをしました。記憶に残っている先生の言葉は沢山ありますが、特にフランスの経済学者であるPikettyがCapital in the Twenty-First Centuryを2015年始めに出版した時に、Dore先生はこの本についてすぐにコメントを発表され、そのコメントをメールで送って下さいました。その内容は、所得格差の問題は、教育の問題とも深く関係しているということであったと思います。教育の格差（教育の内容や教育を受

ける機会があったかどうか）がその後の所得の格差に関係しているということであったと記憶しています。当時、先生は90歳だったと思いますが、以前と変わらず頭脳は明晰で、鋭い指摘に私はいつも驚かされました。その後、2016年の始め頃だったと記憶しておりますが、メールを送っても先生から返事が来なくなり心配していました。

Dore先生はある時私に日本語の「恩師」という言葉は嫌いであると言われました。その理由は先生と生徒という立場の違いはあっても、お互いに平等・対等であり、自由に意見を述べ合うことが大切だと考えていたためだと思われます。私の経験ではこのような考え方をする人は少なく、先生の教育者としての姿勢に学ぶところが大きかったと今でも思っており、感謝の気持ちで一杯です。

Thank you, Ron, for everything you did for us.



若き日のDore先生：息子さん（Jonathan）の言葉から：Here's a photo you may know that I think captures something of how Dad would want to be remembered.

キャンパス便り

原祥子 (はら さちこ)

MA in Globalisation, Business and Development
'19年修了予定



こんにちは！現在、サセックス大学IDSでビジネスと途上国開発の関係を勉強しております原と申します。留学の背景や入学から半年以上がたった現状をお話します。

経済格差に対する強い違和感とマラウイでの原体験

私が国際協力を目指し始めたのは、子供の頃に強烈な格差社会を実感したことが根本にあります。仲良しですが比較的貧しい家庭で生まれたこと、また地方で生まれ都会との差を感じたことから、先天的に生じる経済格差・機会格差について幼少期から強い違和感を抱いていました。その後、大学に行ったインドのマザーテレサボランティア活動で、貧しい女性たちが劣悪な環境で暮らす場に会い、世界には自分の現状よりも理不尽な環境で生きている人々が多くいることを実感しました。その経験によって、経済発展を通じて人々の生活向上を行う仕事につき、強い違和感を抱く途上国の貧困問題に人生を通してアプローチしたいと思うようになりました。

貧困問題にアプローチするにはビジネスを知らなければならぬと考え、大学時にはBOPビジネスを学び、卒業後は日本のビジネスを学びたいとICTメーカーで法人営業に約3年従事しました。その後は、開発途上国の現場でビジネス支援の知識を深めたいという考えから、青年海外協力隊でマラウイの県庁スタッフとして、ビジネスのスタートアップ支援や収入向上活動プロジェクトに従事しておりました。マラウイでは技術やモチベーションがあるのに収入が得られない人々の葛藤や抱える問題に向き合う機会が沢山あり、先天的な理由で苦しむ人々が沢山いました。彼らが貧困から抜け出すためにはどうしたらいいのか、この問題に対しアカデミックからはどんなアプローチが提唱されているのか学びたいと思い、サセックス大学でビジネスを通じて開発を勉強することに決めました。

同じ志を持った仲間との学び

「マラウイのような後進国が経済発展するためにはどうしたらいいのか？」私が協力隊中に2年間悩みに悩んだことを、アカデミックから考えることができるので、授業はとても楽しいです。同じコースには世界各国から来た30人が「ビジネス」という同じ興味を持って勉強しており、皆のモノの見方の違いに、一人で悩んでいるときには気づけなかった沢山の考え方を得ています。授業はもちろん、それ以外でもたくさんの学びの機会があります。同級生はみなアクティブで、授業以外にも沢山のイベントを実施しています。先日パレスチナ出身の同級生が行った、パレスチナとイスラエル問題についての講演会がとても印象的でした。パレスチナの問題はテレビや大学の授業を通して知ってはいましたが、当事者から彼らがどのように苦しんでいるか、問題に立ち向かっているか、どんな思いを持っているか、何うのはとても衝撃的な体験でした。特に、パレスチナの講演では、講演者が「子供の頃からイスラエルがパレスチナの人々の権利を奪うことに違和感を覚えたこと」、「難民として外にいる多くの国民は帰りたいと思っていること」、「しかし平和を考えるとイスラエルに占領されるのを受け入れるしかないこと」、彼自身の諦めや憤りの思いがとても響きました。このような、このイギリスで毎日経験する日常がすべて学びになっています。

協力隊から大学院にいて感じるもやもや

マラウイの現場からアカデミックの世界に行くと、ずっと悩んでいることがあります。それは、「裕福な学生が豪華な環境で勉強している世界と、途上国で貧困に苦しんでいる世界が私の中で遠すぎて繋がらない」ということ。例えば、ある日授業が始まる直前に、南アに出稼ぎしているマラウイの友人から連絡が来ました。彼は協力隊中にすごく仲良くしていた一人。「今朝ボスの弟が殺された。今後どうなるかわからないよ。早くマラウイに帰りたい。僕に投資して、いっしょにプロジェクトしよう」ニュアンスから、彼は結構センシティブな雰囲気。ちゃんと彼に向き合い、すぐにでもプロジェクトの話したかったのですが、授業で返信できませんでした。他にも、去年仲良かったマラウイの同僚が亡くなったことがありました。「なぜ、面白くて未来のある友人が亡くなったのか。それは私の勉強している事で実際どうにか出来る事なのか」彼が亡くなったと突然の連絡をもらった時、私はマラウイの現地とここで勉強していることの間途方も無い遠さを感じて、涙が止まりませんでした。

私はいい大学院で「アフリカの貧困」を勉強しているのに、実際友人が苦しんで助けを求めている時に授業や自分のキャリアを優先にしている自分。もちろん自分を犠牲にしてまで国際協力するべきではないと思いますが、「世界をよくしたい」という開発学のキラキラさと、現場で本当に苦しむ人の遠さを強く実感しました。大学卒業後も、このもやもやを持ち続け、次に繋げていくのが、今後の課題だと思っています。

キャンパス便り

広川 祐美 (ひろかわ ゆみ)

MSc International Marketing '18年入学



図書館前のクリスマスツリーでコースメイトと。
ツリーの大きさは衝撃でした！

留学のきっかけ

日本の学部生の頃にジュネーブの国連本部や、UNHCR、ILOなどの各国連機関を訪問する大学主催の研修旅行に参加したことが一番のきっかけです。もともと経営学部を専攻していたのですが、研修で各国連機関にとってどうビジネスセクターの関わりが重要視されているかの講義を受け、それまで私が持っていた利益追求だけがビジネスの役割ではなく、これからは事業を通した社会貢献がより求められていくことを知りました。そうした分野に関わる仕事をしたいと考える中で、まずは社会貢献を通しながらも継続的に利益を上げることができるビジネススキルが必要だと考えたため、マーケティングの専攻と、学びの原点となったヨーロッパへの留学を決意しました。

授業の様子

私のいるマーケティングのコースは中国人が偏る他のビジネスのコースと違い、学生達はヨーロッパ、カナダ、中東、アジア各国などから集まっていて、国際色豊かな環境で勉強することができます。授業で社会貢献とビジネスの関係を中心に取り上げられる

ことは少ないですが、学生達と触れ合う中でビーガンのように、環境や社会への意識が高く実践で振舞っている姿を見られることは刺激になります。

また、海外市場の中で日本の存在感が私の想像以上に高いことを実感しました。授業で日本企業が例に上がることもよくありますし、学生の中でも日本に関心のある学生に多く出会いました。興味深かった点は、みなさんも海外で日本製ではないのにパッケージに日本語が書かれている製品を見たことがあるかもしれませんが、あれの1つの理由は日本製品の質への信頼感と同様のイメージを消費者にとってもらうための戦略になるからだそうです。

こうした中で改めて日本人としての誇りを感じるとともに、それでも海外の中で日本の存在感が高いのは、過去に多くの日本人の方々が海外で戦ってこられた結果だと思うので、その感謝と、私も同じように活躍していきたいと強く思うようになりました。

寮生活

寮はオフキャンパスで、中国2人、インド、コロンビア、私という全員女性のメンバーで生活しています。いくら多文化の中で生活していても、例えば部屋を清潔に保ちたい、など簡単なことですが、人間として普遍的なものは全世界に共通してあって、そのおかげで皆礼儀正しく、問題があっても思いやりながら生活ができています。それだけの良い友人を持てたことを嬉しく思います。夜にそれぞれの文化、政治、結婚観など、色んな話ができることも興味深いです。たまに課題が溜まっているのに話が盛り上がりすぎて、結果睡眠を削ってしまうことになるので注意しつつのバランスが大変です(笑)。

近況

今年もブライトンで雪が降り、ちょうどその日がコースメイトとチェコ旅行に行った帰りだったので、チェコでは経験しなかった雪をそれより暖かいはずのブライトンで経験し、帰りは荷物を持って30分程雪の中を歩くことになってしまいました(笑)。

最近、前期の成績が発表されましたが、結果として満足いく成果を残すことができたので安心しています。後期が始まり、4月のロンドンキャリアフォーラムを始めとした就職活動と並行していく中で、なかなか勉強に時間を割けず、両立に苦労しています。それでも、企業の方とお話したり、説明会で出会う他大学に留学中の日本人学生と話す中で、私が今学んで取り組んでいることよりさらにもっと学ぶべきことは多いことを改めて実感させられました。

こうしてサセックスに送り出してくれた両親に親孝行するためにも、しっかり学びきることと、学んだことを社会で活かせるような舞台をしっかり掴んでいきたいです。

キャンパス便り

津留 健太 (つる けんた)

MA in Social and Political Thought '18年入学

自己紹介

2018年9月からサセックス大学で勉強している津留と申します。この度はニューズレターに寄稿する機会を頂きましたので、私の大学生活や知り得る範囲での周囲の様子などをお伝えしたいと思います。といっても大学と自宅を往復することくらいしかしていないためあまり大したことは書けませんが、こちらの様子が少しでも伝われば幸いです。

私は大学卒業後に公務員として働いてきましたが、昨年の9月から13カ月間の休業を取得してこちらで社会思想や政治哲学の勉強をしています。サセックス大学は英米系の大学にしては珍しく大陸哲学の研究が盛んであり、モジュールもヘーゲル、マルクス、フランクフルト学派といったドイツ系の哲学を対象としたものが多いのが特徴です。私は日本の大学院でハーバーマスというドイツの社会哲学者をテーマにしていたこともあり、留学先としてサセックスを選びました。

勉強の様子

出席が必要となっているのは週に2回のセミナーだけです。それ以外にも学部の授業や自主的な勉強会等に出席することができます。私も今学期はセミナーのほか、学部の講義とドイツ語のクラスに参加しているところです。

セミナーでは、逐語的に文献を理解するよりも全体像や要点を把握することに比重が置かれていると感じました。例えばドイツの哲学者の本を読む場合でも基本的には英訳を使用しますし、本全体を理解するよりは特定箇所だけ読んで重要な概念を把握することを求められます。

他方で日本の大学院だと原書を少しずつ精読するスタイルが主流かと思いますが、このように国によって文献に対するアプローチの方法が異なるということは、こちらに来て初めて知りました。

ちなみに、私の英語力では読めない哲学書が時々ありますので、その場合は日本語版をkindleで購入し、日本語、英語を対比しながら時間をかけて読み込んでいます。こちらに来てから、Amazonの便利さを改めて実感しました。

ブライトンの様子

ブライトンも最近はやうやく暖かくなってきて、晴れの日にはキャンパスの芝生に寝っ転がる学生も出てきました。周りの人に聞くとだいたい平年通りの気候

とのことですが、特筆すべきは1月に何年かぶりの大雪ということで交通機関がすべてストップしたことです。個人的には5センチ程度の積雪でインフラが麻痺することに驚きましたが、それだけ雪が降るのが珍しいということなんでしょうか…。



プライベートの過ごし方

平日は家と大学を往復するだけ終わってしまうことが多いのですが、土日の朝にはイングリッシュブレイクファストを食べてから大学に行くことがあります。様々なカフェのブレイクファストを食べ比べるのも、イギリスならではの楽しみです。

他方でイギリスの料理はイングリッシュブレイクファスト以外特筆すべきものがあまり無いため、外食する場合はブライトン市内のエスニックレストランに行くことがほとんどです。もちろん店にもよりますが、イギリス料理（というものがあるのかわかりませんが）以外のレストランは意外とおいしいことに気づきました。個人的な意見としては、インド料理とギリシャ料理に関しては外れが無いと感じています。



Preston St. のギリシャ料理屋で食べた前菜（2人分）です。この後にメイン（肉or魚）が来るので、結構な分量でした。

留学生活も半分を切り、先日から修士論文のテーマ決めなどが始まりました。この1年はせつかく自分のことに集中できる時間ですので、やり残すことが無いよう精いっぱい過ごしていきたいと思います。

ALUMNI NOW!

吉田 和浩 (よしだ かずひろ)

MPhil. in Development Studies, '93修了
広島大学教育開発国際協力研究センター長/教授



サセックス大学在学中のみなさま、同窓生のみなさま、こんにちは！卒業してすでに四半世紀が過ぎていて、自分でも驚いています。恥を忍んで、その後の半生（反省？）についてお話しします。

私が開発学研究所 (IDS) にいた頃はハ

ンス・シンガー教授とマイケル・リプトン教授がブラウンバッグ・セミナーで熱弁を振るい合い、ロバート・チェンバースの住民参加型開発が世銀にも大きな影響を与えていた頃です。IDSの授業に付いていくのもやっとならなくて、タームペーパーが書けずにひいひいでした。サウスタウンを歩き回って、開発とは、と思案にふけていたこともよく覚えています。

ある日、ピジョンボックスに世界銀行のヤング・プロフェッショナル募集のフライヤーを見つけ、試しに応募してみました。最初の書類選考をなぜか通過し、フルプロポーザルを提出したら、面接に呼ばれることになりました。世銀本部からの課長レベルのスタッフ3名に面接され、しどろもどろに $Y=C+I+G+(X-M)$ の数式を説明し、経済学で知ってることはこれくらい、と開き直り、あきらめ気分で面接を終えました。なのにあろうことか、採用となったのです。9月13日に一斉採用、と言われ、修論もそこに仕上げ出て出し逃げ。一路ワシントンDCに赴任しました。

すでに経済開発より人間開発に携わりたい、と思うようになっていたのですが、最初の配属先はインドのエネルギー課！もらった名刺にはEconomistのタイトル！これは人違いだ、と言い張ったのですが、間違いない、君には最初の配属先を選ぶ権利はない、と言われ、諦めましたが、その配属先の課長がなんと面接官のひとりでした。そういうことか！私の経歴に、水力発電所の現場事務所長などプラント輸出業務経験が多かったから。IDSでの私のSupervisorが世銀に影響力があつたAdrian Wood (のちのDFIDチーフエコノミスト)で彼の推薦が奏功したのか。サセックス卒業前の採用だったので、成績表が未完成だったから。恐らくそのすべてが偶然の奇跡を生んだのでしょう。

半年間はこの課で我慢し、やっと自分で次の配属先を選ぶことになりました。それでたどり着いたのがアフリカ局で教育や保健、貧困を担当している課でした。

周りはその道の専門家ばかりでみんなPhD。私は熱意だけのMPhil。アフリカの教育課題についても、開発事業の案件形成も、セクター調査も、教を請いながら全部手探りでした。それもYPだから許されたことと、ありがたく思っていました。ガーナ、ナイジェリア、シエラレオネ、身の危険を感じるようなことも何度か。ちょっと言えない楽しい経験も。そしてこの間にも、メンターのPeter Mook、戦略的思考の先生であったAdriaan Verspoor、その後ユネスコの教育トップにもなったNick Burnettをはじめ、多くの方にお世話になりました。何年かして様子が分かってきたころ、人間開発部門副総裁室兼教育セクター一部に移り、この分野の戦略ペーパー作成などをしていました。

そんな折、当時の国際協力銀行 (JBIC) で、社会開発分野の円借款を強化したいので、力を貸して欲しい、というお誘いを受け、しばらく世銀を退職してセカンドメントしたのです。インフラ案件の社会配慮、貧困削減事業や教育、保健事業の審査、セクター調査、人材育成分野の戦略策定など、素晴らしい仲間たちと充実した仕事をし、JICAの教育分野の人たちや大学の先生をはじめ、多くの方たちと出会いました。そしてこの組織での仕事のやりがいに魅了され、正式に移籍する決断をしたのです。それまでは、日本の教育分野の国際協力はちまちましていて政策との連携がなく、世界の潮流から周回遅れだと叱咤激励していたのが、中に入れば、それはそれで素晴らしい仕事ぶりです。多くを学ばせてもらいました。

ところがJBIC (円借部門) とJICAが統合する話が出て、また私もいい年だから海外事務所の管理ポストに、という話が出てきて、ん〜、やっぱり教育開発の仕事を続けたいなあ、と思案していたところ、現在の大学にいいポストがある、という噂を聞きつけ、応募したところ、またしても研究実績もまともでない私が採用されてしまったのです。

現在の所属先 (CICE=サイズ) は、所長の私が言うのも口幅つたいですが、国際教育協力を実践的に研究開発する国内屈指のセンターで、世銀勤務の時にも聞き知っていました。研究センターとは言え、(教育に強い広島大学の) 大学院の授業や学生指導もするので、逆に自分にとってもいい勉強になります。アフリカやアジアの大学研究者との共同研究もしています。

一方で、世銀時代からの人脈を使い、またユネスコとも近しく仕事をしています。文科省、外務省との仕事も少なくなく、近年はSDG4のターゲット設定に中心的な役割を果たす業務にも携わってきました。この話は長くなるので別の機会に。今年からはそのSDG4に関わる国際的な調整推進機構であるSDG-Education2030ステアリングコミティーの共同議長を務めています。

人生の物語は結果として出来上がるもの。一直線でないのも楽しいものです。目の前にぶら下がった餌に食らいついて繋がる人生もまた良し。きっと知らないうちに多くの人が支えてくれているのですから。

感謝、感謝。(yoshidak@hiroshima-u.ac.jp)

ALUMNI NOW!

塩畑 真里子（しおはた まりこ）

DPhil in International Education '07年修了
セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン海外事業部部长



シリア難民の子ども支援の事業を同僚と視察

学部時代の進路の選択

1990年代前半、東京近郊の大学で言語学を専攻していた私は、卒業後、ジャーナリズムへの道に進むことを考えていました。時は、ボスニア・ヘルツェゴビナ紛争やルワンダの大虐殺の最中でした。就職活動の準備をするなかで、紛争や貧困などの問題を伝え、報道する、という立場ではなく、現場での活動に関わりたい、と次第に考えが変わり、一転して学部卒業後は都内の大学院で開発学を学ぶことにしました。修士号取得後、開発コンサルタント会社に勤務、外務省やJICAのODA業務に携わり、年に半分以上はアジアやアフリカへ海外出張、という生活を4年半ほど送りました。開発コンサルタントの仕事は、最初は非常にやりがいを感じましたが、次から次へと様々なテーマを扱わなければならない、仕事に深さを求められないことや受入国政府の関係者にも支援の目的が分かりづらいことが多く、様々な疑問に感じるようになりました。毎回、「現地調査」といっても業務指示書以上の成果は求められないことにもフラストレーションを感じるようになり、一度自分で本当に納得する調査をしてみたい、と強く感じるようになりました。それまでの業務で西アフリカのセネガルに行くことが多かったこと、学部時代の専攻がフランス言語学だったこと、修士課程で人類学的視点から識字を学んでいたことなどの背景があり、現代セネガルのコンテキストで、話し言葉と書き言葉の関係を納得がいくまで調査したい、と思うようになりました。セネガルで仕事をした際に、会議ではウォロフ語で議論しているのに、板書はフランス語、という習慣に遭遇し、驚くと共に興味深いと思ったことがあったのです。ポスト植民地のアフリカで現地語と植民者の言語の関係と開発への意味合いをテーマにする研究計画をサセックスのメディア・スタディーズのコースに提出したところ、「途上国をテーマに研究し

ている指導教官はいない」とのことで、教育コースへ私の研究計画書が転送されました。

サセックスでの研究生活

当初、どちらかという、メディア的観点から音声言語、文字言語、画像の関係に関心があった私は、教育学、と言われ戸惑ったのですが、社会科学調査手法を学びたい、という気持ちが強く、自分が研究したい内容は広く言えば社会学の範疇だろう、と考え、これも何かの縁、と思い、教育学コースに進みました。2002年の10月のことでした。最初の1年間は社会科学のメソドロジーと手法(メソッド)をひたすら勉強しました。日本の大学では教わらなかった、社会科学と自然科学の差異の哲学的議論という授業は必修だったのですが、英語を母語とする学生の多くも内容を理解するのに苦労するほど難しいものでした。なぜ統計やインタビュー、調査票といった手法(メソッド)を使うのか、それを正当化するためにはメソドロジーが基礎にあるということ、つまり、メソドロジーとメソッドの一貫性の重要さをさんざん叩き込まれ、これは今の実務的な業務でもとても役に立っています。今でも時々この授業のことを思いだし、あの時もっと深く理解できていればよかったな、と感じます。セネガルで約1年のフィールド調査をした後、2年少しかけて論文を完成させました。論文執筆は長く、つらい時もありましたが、指導教官や友人に恵まれ、ただ論文執筆をするだけではなく、イギリス南東部の美しい自然のなか、週末は様々なところへウォーキングに行くなどして生活も満喫できたと思います。歴史的建築物や自然景勝地の保護を目的とする「ナショナル・トラスト」運動をご存じの方も多いと思いますが、サセックスにも数々のナショナル・トラストの遺産があり、なかでもキップリング、ヴァージニア・ウルフ、ヘンリー・ジェームズといった文学者が住んでいた家も複数あり、何度も足を運びました。

NGOの仕事

今は、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンに勤務し、日本の政府や寄付者から資金を集め、アジア、アフリカ、中近東で事業を実施するための調整や事業管理を行っています。事業の現場にも年に数回出張しています。近年、世界的に紛争が長期化、複雑化し、私たちも南スーダン、シリア、イエメン、ミャンマーのロヒンギャ族の問題、と実に多様な人道問題への対応をしています。セーブ・ザ・チルドレンという国際的な組織の中に身を置き、様々な価値観を持つスタッフと協力しながら事業を実施すると同時に、政府や寄付者の期待にも応えるという仕事は時に非常にチャレンジングです。これから色々な課題に挑戦していきたいと考えていますが、サセックスで学んだことと経験は今後もずっと自分の基盤にあると信じています。

Traveling the World

黒田 史穂子 (くろだ しほこ)

MA in Gender and Development, IDS '02年修了

イギリス領フォークランド諸島

2007年12月下旬にホンジュラスでの活動の任期を終え帰国した頃、大学時代の友人から南極に野生のペンギンを見に行かないかと誘われ、チリで協力隊員をしていた私は、里帰りも兼ねた旅行もできると思い大賛成。日本から南極までは複数行き方ありましたが、費用的に検討できた航路と船便で往復するには、友人の最長2週間の休暇では難しく、それでも野生のペンギンが見たいという友人の熱意に押され、日本からアルゼンチンの南西に位置するイギリス領フォークランド諸島へ旅された方の唯一のブログを見つけ、野生のペンギンたちの楽園たる美しい写真に「行ってみよう」ということになり、LA、チリの首都サンティアゴ、南端の町プンタアレナスを約2日半かけて経由するフォークランド諸島イーストフォークランド島への旅行を計画しました。当時、行政府のあるスタンリーまでの航路はプンタアレナスから往復週1便だったため、仮にブログの写真通りでなかったとしてもクリスマスを有意義に過ごせるよう、読書用の本を沢山持参して読書三昧しようと覚悟を決め、日本を出発しました。

ペンギンの楽園へ

フォークランド諸島は、1984年にアルゼンチンが領有権を主張し開戦、イギリスが再領有しました。そのため島の一部には撤去されずに未だに砂浜に残る地雷群も。公用語は英語、B&Bの朝食はイングリッシュブレックファスト！大学院を修了してから久しぶりで感激したのを覚えています。約11の島で構成され、1日目はかつての捕鯨基地の面影を残すジブシー湾を一周しブライトンのような街並みを散策、2日目はよいよ野生のペンギンたちに会いにイーストフォークランドの北東に位置する Volunteer Point へ！人口約4,000人が居住するスタンリーから車で約1時間半、車から降りてみると草むらに何万羽？！の王様ペンギンが生息、この時期にしか見られない貴重な求愛のポーズも見ることができました。草むらを抜けると果てしなくキラキラと広がる白浜に王様ペンギンたちが列をつくり行進、茶色の羽毛が生え変わるため、頭にまだ茶色の羽毛を残した青年ペンギンの様子はアフロヘアをきめているかのようになんと可笑しく幸せそうでした。他にもジェンツー、マゼラン、イワトビなどのペンギンたちの生活の様子を一日中、間近に観察できる貴重な体験をすることができました（右写真はすべて筆者が撮影）。



ジブシー湾の地雷群



ボランティアポイント等で見られるペンギンたち



SIUK留学フェア in 東京

3月24日(日)に東京で行われたSIUK イギリス・アイルランド大学・大学院留学フェアのサセックス大学のブースには、13名の高校生から社会人まで幅広い層が訪れました。訪れた方々からは、関心のある分野がサセックス大学ではどこで学べるか、入学に必要な英語や社会人経験(ボランティア経験)の条件や、奨学金、宿舎を含めた大学周辺の環境や治安状況などについて質問が出され、サセックス大学の担当者(James)がそれぞれ詳しく説明していました。また同窓生として高瀬千賀子さんと私もブースで応対し、自ら学んだ経験や、留学にあたっての準備や留学生活についてのアドバイスなどをしました。やはり日本人の留学経験者がいた方が説得力があるのでは、とアドバイスをしながら感じました。

訪れた方々の中には開発関連や教育学を学びたいと考えている方が多く、Jamesからはサセックス大学が今年も開発学分野の大学ランキングで世界一位を取ったことの説明があり、その豊富な学部・研究所のラインアップの中で各自の経験や関心に応じて、どこが最も適しているかなどの丁寧な説明がありました。Jamesは学校中でその分野がどこで学べるかに詳しく、天文学など、どの分野でも適時に答えていました。天文学を志望して来た方は、論文でサセックス大学で働く先生を調べて、その先生に学べるか聞いていました。訪れた方々は、それぞれの質問に対するJamesの説明に、納得して帰られているようでした。

Jamesは、日本の留学志望者はよく調べてからフェアに来てると感心していました。私も同感でしたが、その上に驚いたことは、訪れた方々(将来の学生さんたち)の英語力です。Jamesと不自由なく質疑応答のやりとりをされている方が多く、その英語力の高さに日本の将来の留学生を頼もしく感じました。

(加藤 珠比)



SIUK 留学フェアにて(右から James 氏、高瀬氏、筆者)

同窓会事務局からのお知らせ

2019年度新留学生のためのオリエンテーション

日時：6月8日 12時30分～15時30分

場所：ミャンマーエコツーリズム事務局

新宿区南元町13-3ライオンズマンション
信濃町504

申込方法：同窓会Facebookまたは
usaa.japan@gmail.comまでご連絡下さい。

2019年度同窓会総会開催のご案内

日時：6月8日(土) 16時～18時

※総会后、18時～20時で懇親会を予定しています。参加申し込みの方に個別にご案内致します。

場所：主婦会館(JRまたは丸ノ内線・南北線「四ツ谷駅」 麹町口 徒歩1分)

定員：40名迄

申込方法：同窓会Facebookまたは
usaa.japan@gmail.comまでご連絡下さい。

同窓会Facebookのご案内

サセックス大学同窓会の活動については、FacebookやHPで公開しています。Facebookから「サセックス大学同窓会(University of Sussex Alumni Association Japan)」を検索、いいね!をクリックしてフォローをお願いします!

HP: <http://www.usaa.j.org/alumni/index>

メーリングリスト登録先のご案内

ニューズレターの配信やイベントのご案内をメーリングリスト宛にお送りしています。届かない、周囲の同窓生の方に届いていない等ありましたら、usaa.japan@gmail.comまでご連絡下さい。

編集後記

今号では3月に開催された2019年度年BEO、SIUKの留学フェア、親交の深かったDore先生の思い出を掲載させていただきました。また、キャンパス便り、Alumni Now!では多くの同窓生の皆様がキャンパスや世界各国で活躍されている様子を、Traveling the Worldでは旅のエピソードをお届けしました。記事寄稿にご協力頂きました同窓生の皆様、有難うございました! 在学生から「キャンパス便り」、卒業生から「ALUMNI Now!」、在卒業生から「Traveling the World」への寄稿を随時募集しています。編集者：黒田史穂子